堕ちてゆく、僕達

煉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
堕ちてゆく、僕達

【Ｎコード】
Ｎ１４２７Ａ

【作者名】
煉

【あらすじ】
ある理由から「軍人」になりたい少女の話です。オリジナルキャラ「スズネ」が出てきます。

グッドナイトスウィーツハーツ

・・私は軍人になりたかった。
最愛の兄を殺され、私は「復讐」をしたかった。

あとで・・それは、とても無意味なモノだと分かったけど

「君、どこで降りるの？」

ヒッチハイクで乗せてくれた男性の声で、我に返った。

セーラー服の大荷物、おまけに剣道の竹刀まで持った少女がヒッチハイクなどしてよく、怪しまれなかったものである。
それとも運転手は顔に出さず、密かに怪しんでいるのだろうか？

いや・・そこまで「町」などが壊れているのだろうか。

車の窓から見える景色は、ほとんど焼け野原に近かった。

私は答える。

「北中・・」

「ああ、あの町か」

運転手は地図を片手にハンドルを廻した。

「君って中学生なんだね。あんま大人っぽいから高校生だと思ったよ！背、１７０はあるんじゃない？」

私はそんなに大人っぽいのだろうか？

腰まで伸ばしたストレートを、真っ直ぐに結んだ髪型はガサツにしか見えないし声も高すぎる方だと思う。

そもそも・・身長１７０という所で終わっている。

何故なら・・・

「中1では一番高い方だと思います・・」

私はまだ13歳だからだ。

運転手の男性も、すごい驚きようだった。

「へぇ・・そうか。随分高いな」

（慰めになってないような・・）

あえて、言葉を飲み込む。

「俺の娘も・・確か、そん位大人っぽかったよな・・」

娘自慢だろうか？

「可愛くて、誠実で良い子だよ」

やっぱり、娘自慢だった。

「・・・・その娘さん、今どこに？」

あえて聞いてやる。

・・・・・しかし、彼は曇った表情をした。

そして一言、

「東京の大学に行った」

と言った。

東京なんて、もう無いのに。

「君はどうして、わざわざ自衛隊の町に行くんだい？」

運転手が、ワザとらしくサングラスを掛ける。

表情を隠すつもりだろうか？

私は答える。

答えてやる。

「軍人になりたいんです」

暫くして、「自衛隊の町」と呼ばれる平和ボケした町に着いた。
風が通り抜け、胸元の水色のリボンが揺れた。

小学生が笑いながら学校に向かう光景は、懐かしさともどかしさで
胸が苦しくなる。

そして

そんな私の胸を、もっと苦しくしたのは
肩までの髪をキレイにそろえた少女だった。

走ってきた彼女に、思い切り激突する。

「いった・・・・・」

「いたたたたた・・」

互いに、痛みを堪える。

謝ろうと顔をあげたら謝ってきたのは彼女からだった。

「ごめんなさい！！！」

「は・・？」

急に、謝られても・・

それより、なんて可愛い子だろう。

キレイとはいかないが、可愛いの部類に入る彼女の顔をまじかに眺めた。

身長が・・驚くべくも小さい。

同級生・・・？

「あっ！ごめんね！！急いでるのっ」

「あ・・・いえ」

とろい速度で、可愛くて小さい少女は「地獄坂」を走って行った。

「なんだろう・・・アレ」

この少女との出会いが、私の運命を左右するなんて・・・

そんなの、私「スズネ」にさえ分からなかった。

グッドナイトスウィーツハーツ（後書き）

＜ｆｏｎｔ　ｓｉｚｅ＝２＞サイカノシリアス連載第一弾。
もう一つの連載があまりにもギャグなので、思い切りシリアスにしてみました。
タイトルも・・・分かる人には分かる（笑）

このスズネという少女という少女が、ちせとどう関わっていくのかまあ・・見れたら見てください。＜／ｆｏｎｔ＞

桜

・・・昔、「誰か」が言った気がする。
桜の木の下には「死体」が埋まっているのだと。

「君がスズネちゃん？」

校庭で一人、桜の木を見ていた私に男子生徒が声を掛けた。

「・・・・何？」

「いや～～中々探しても見つからなくてさ、クラスのみんな探してたんだよ」

「・・・どうせ・・授業なんて無いんでしょ？」

聞いたらいけない話題だったらしく、男子生徒の少し曇った表情を見た。

しかし彼は、すぐ明るさを取り戻す。

「いやー、顔は可愛いのにキツイな～」

「可愛くない」

身体と心、すべてに持って否定する。

「ホント、キツイな～・・・東京の人？」

・・・・とっくに滅んだ

「沈む町」

東京。

私の、故郷。

「じゃあ・・ここの人はキツイ人はいないの？」

「え」

「・・・いないの？」

彼は固まる。

ほら、どうせ答えられないんじゃない。

・・なら、ほっといてよ。

「あの・・・さ、」

「何？」

「キツイ人とか、この世界に一杯いると思うよ。・・・たくさん」

！

「ほら、高等部の先輩のアケミとかシュウジ・・あ～知らないか・・

えっと、卒業したテツ先輩ってのもあんま性格キツかったし・・」

「知らない人・・」

「あ～～っ！！ごめん！！いたんだ！そうゆー人っ」

名も知らぬ生徒は、口を一度閉じた。

私も、黙る。

「・・・ねえ」

生徒が口を開く。

その声は、さっきの声より凛としている。

「なに」

「桜の木の下には・・・・何が埋まっていると思う？」

彼の問いに、私は答えた。

「死体」

「・・今、起こってる戦争はさ・・桜みたいだね」

「どういう事？」

「桜はキレイに咲いてるけど・・その下には、たくさんの犠牲があるんだよ」

「・・・・あなたも、その一人？」

彼は、笑う。

「こんなに綺麗なのに・・不思議だね。

桜の色が・・たまに血の色に見える」

彼の手に触った。

確かに、温かかった。

「戦争・・嫌いなの？」

「・・・うん。嫌いかな・・・」

彼は続ける。

「桜って・・君に似てるね。

儚く・・散っていきそうな君に」

「・・・・・」

「そうだ・・、君名前は？」

「・・・・・・・・・・・スズネ」

「俺は、君のクラスメイトの・・・・・・・・・」

風が吹く。

桜が散る。

私の手元に残ったのは、一切れの花びらだった。

「・・桜の木の下には・・死体が埋まっている」

木の下に置かれた墓石を横目に、

私は新しい居場所に入っていった。

桜（後書き）

「桜の木の下には、死体が埋まっている」
この私の好きな詩と、私に多大な影響を及ぼした「東京バビロン」
というマンガを手に、書いてみました。
戦争って・・本当、犠牲無しにはできない行為ですよね・・。

泣き叫ぶこと。

『スズネ・・・お前は泣くという行為を知らないのか？』

ずっと昔、兄さんがそう言った。

「・・・・泣けない」

私の予想通り、クラスには空の机があり、花が添えられていた。

桜の花。

誰だか・・わかる。

「スズネちゃん？」

クラスの女子が、私に言い寄ってきた。

「何」

「友達になろう」

・・・・・東京では、ありえない行動だった。

東京のクラスメイトは、無口な人間を避けるから。
私みたいな。

「どうしたの？友達にならないかい？」

「・・・・・・・・・・・」

「悪いけど・・私」

友達なんか必要無い。

こんな残酷な言葉を吐いた私は、自分が分からなくなる。

「部活、何入るの？」

それでも、彼女は言い寄った。

いいかげん・・うるさい。

しかも、男子も寄ってくるから

「北海道」なんて・・不思議なトコだ。

もっと、冷めてると思った。

「軍人」の町なんか。

「やっぱ、スゲーよな！！竹刀！！」

「！・・・その竹刀に触ら・・っ」

その時、

クラスのドアを叩く音がした。

そこには・・・

「あんたら、転校生困ってんでしょ？」

ショートカットの少女。

目が少しツリ気味で、凛々しい。

「なんだよ～アケミ！！高等部が中等部に割りいるなよ！！」

「アケミじゃなくて、先輩！！！！」

なんだか、よく分からないが逃げる出口ができた。

「・・・ありがと」

彼女の耳元にしか聞こえない程の、声。

「あ！！ちょっと！！」

「どうしたんだよ！アケミ！」

「聞きたい事あったのに」

校庭の裏に、古びた道場があった。

高等部と共同だろう。

高校生が使いそうな木刀まで置いてある。

「・・・・」

そこで、制服から袴に着替えた。

防具は付けず、竹刀だけを振りかざし、基本の動きをした。

剣を振るときほど、落ち着いた事は無い。

どさっ

「！！」

「あの・・ごめんなさいっ！！見るつもりは・・・っ」

・・・・朝見た小型少女。

「・・何しにきたの」

「あっ！！えーと、アケミが中等科に行っちゃったから・・・あのっ・・・・」

小型少女は私の顔を見て、顔をより紅潮させた。

「今朝お会いしましたよね！！ごっ・・ごめんなさい！！気付かなくてっ」

「・・・・・・」

（・・高校生だっつたのか）

「あの、ごめんなさ・・・ああっ！！！」

少女がそのままこけ掛けて、私に覆いかぶさった。

そしてボキッと嫌な音。

「あ」

「ああ～～～～っ！！竹刀がっ！！」

竹の一本が折れていた。

「ごめんなさい！！すいません！！」

「いい・・・この位・・修理すれば直る」

「でもっ」

少女の顔は、涙が伝っていた。

「・・・・・お前」

「あっ！！はいっ」

「どうやったら・・・・・泣けるの？」

「へっ？」

そこに、低めの男の声が聞こえた。

「おーい、ちせ・・授業始まんぞ！！」

その、ぶっきらぼうな声は

聞き覚えがあった。

思わず、名前を呼ぶ。

「・・・・・シュウ？」

「スズネ・・・さん？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1427a/

堕ちてゆく、僕達

2010年10月9日16時27分発行